
甘いようで甘くないバレンタインデー？

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘いようで甘くないバレンタインデー？

【Nコード】

N5907B

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

前回（生まれ変わる命の為に）で式部彩に里へ顔を出すよ言われた妖狐の上級クラスの玉藻烈狐丸は、嫌々ながら里に帰るとある事件に巻き込まれる。これは、甘いようで甘くないような妖怪のお話

（前書き）

この作品はテーマ小説「甘小説」の投稿作品です。他の方々の作品にもよろしければ眼を通して下さい。よろしく願います。

森の中、緑溢れる葉っぱのすき間から日の光りがさんと照らす道を、オイラはただひたすら歩いていた。

オイラの名前は玉藻 烈狐丸。

狐の妖怪。妖狐の上級クラスの天狐だ。

今オイラはある場所を目指している。

そして歩くこと数時間――。

「ふぁー！ やあつと着いたつすよ、疲れたあ」

長い道則だった。オイラは息をぜえは、ぜえはと荒くさせ、そして身体中から滝のような汗を流して……とまではいかないけど、疲れたあ。

「にしても、ここに訪れるのも何年ぶりつすかねえ……」

生い茂る叢の丘の上から、オイラは目に映る光景を眺めながら独り言を呟いた。

町や都会から遠く離れた山奥。

そこには妖怪の妖狐が住み着く、妖狐の里がある。

オイラは数日前まで都会である人を捜していたがその途中、知り合いの式部 彩^{さい}に――烈狐丸様、貴方様は我ら善狐の族長なのでよ。たまには、里に帰り皆に会いに行つて下さい――と言われたので、オイラは仕方なく里に顔を出すことにしたのだった。

千歳も越えるオイラだが、里には二百年くらいしか住んでいない。里の族長になるには住んでる時が少ない。最低五百年くらいはないといけない。

更に、オイラはこの里の妖狐ではない。

そんなよそ者の妖狐だったにも関わらず。何故か最上級妖狐の天狐だと言う理由でオイラは勝手に長にされてしまった。

しかも、オイラが里を出て行こうとしたタイミングだから、もう最悪。

そう、あの日は災難だった。

里の妖狐全員が一致団結してオイラを里から出さないようにと阻んだからだ。

てゆーか、オイラを里から逃がさないようにする為に、大木を一瞬で灰にする殺傷力高そうな炎弾を撃ち込んでくるのもどうかと思う。

その時はどうか力付くで脱出したけど、それでも追っ手が何度か来て、

「玉藻様！ 戻ってきて下さい！ あなたしか長に相応しい妖狐はいません！」

何て言う始末……。

うーん。戦国時代の抜け忍も、追っ手がうつとうしく思えて、そしてこんな嫌な気持ちだったのだろうか？

まあ、オイラの場合は追っ手の目的が“抹殺”ではなく“連れ戻しに来た”だからまだマシかもしれないけど、

「やっぱり長つて柄じゃないっすよオイラ……」

そうオイラが溜息交じりで呟いたら、

「……そんな事言わないで下さい、烈狐丸さま！」

後ろの木から黄金色の狐が跳び降りてきた。

「烈狐丸さましか、天狐の妖狐はいないのですよこの里には」

そう言うところ狐は一瞬光を放つと、人間の女性の姿にへと変わる。

「そんなこと言っても楓さん。オイラは人に縛られる生き方は好きじゃないんすよ。例えば良い地位にいたとしてもっす」

彼女の名前は式部しきぶ 楓かえで。

式部 彩の妹であり、妖狐の中級クラスで“金狐”と呼ばれる人を助ける善狐である。

兄の彩は白狐であり、中級の妖狐だが……。

本来白狐は上級に入る妖狐。しかし彩はつい最近なった為、更に年齢がまだ若いと言う理由もあり。中の上と言った扱いになっている。

「しかし、楓さん。久しぶりに姿を見せてオイラに話し掛けてきたっすね？」

彼女は先に話した追っ手の一人だったが、あまりにしつこいのでオイラが仕方なく長になると言っただが為にオイラの監視に廻った妖狐である。

オイラが行方を眩ませない為に、24時間……と言っただけなのに思うけど、ほとんどの時間オイラを監視していた。

それにしても、楓さんが自分から姿を現すとは珍しい。いつもはオイラが呼ぶ時以外、常に監視に廻っていて、全く影を見せないのに。

「烈狐丸さま。私にさん付けはいりませんよ。兄には呼び捨てなのに何故私にだけ？」

「いやあ、楓さんってなんか彩より大人な雰囲気があるっすから、何と無くさん付けしてしまうっす」

頭を掻きながら笑顔でオイラがそう言っていると、楓さんは少し困ったような表情を見せた。

「うーん、迷惑かな？」

「いやっすか？」

「い、いいえ。でも、天狐であり長である烈狐丸さまからそう言われると……気まずいと言いますか……」

「そんな気まずいだなんて、だいたいオイラがそう呼びたいんすから、気にする必要ないっすよ」

オイラが優しく接すると、堅い顔をしていた楓さんはわずかに口元を緩め、

「そうですか……、ありがとうございます」

そして優しく微笑んだ。

人間の間では金狐は太陽をシンボルとしているらしい。

日光のように暖かく、そして金狐として相応しく微笑ましい笑顔を楓さんは見せた。

「さて、里に行くっすか楓さん」

「はい、烈狐丸さま」

そしてオイラ達は丘を降りて里の中へと向かう。

——里に入り、村落を歩いていると、

「玉藻さま！」

「玉藻様が帰ってきた！」

「皆に伝えるんだ！ 烈狐丸様が帰って来たと！」

たちまち村が煩くなり、妖狐が老若男女問わずオイラに群がって来た。

はつきり言つてうざつたい！

……なんて言えたらなあ。

オイラがそう眉をしかめて思っていると、村の皆に楓さんが、

「烈狐丸さまは長旅で疲れていますから、皆様今日は烈狐丸さまを休ませて下さい」

オイラの気持ちを察したのかそう皆に告げると、老いた狐がオイラの前に歩み寄り、

「そうでしたか玉藻様、長旅の疲れが溜まっているとも知らずに失礼しました」

そう言つて頭を下げた。

そのあと、村の妖狐達は皆それぞれの場所に戻っていき、村は入る前の穏やかな静けさを取り戻す。

「烈狐丸様、こっちです」

オイラは先導する楓さんの後について行つた。

そして村の奥にある和風な造りをした大きな屋敷にへとたどり着いた。

中に入ると、やはり広々としている。

「……うゝん、長しか住む事が赦されない屋敷ってのは知ってるっ

すが、それにしても、無駄に広くないっすか？」

そう広い。とにかく広い。

一つ一つの部屋の広さが半端じゃなく。学校の体育館とかダンスホール並の広さだ。

過去一度だけ入った事はあるが、その時はその広さに唖然としたものだ。

「この屋敷は長の住む家になるだけでなく、いろんな行事の時に村の妖狐を全て呼び出す為もありますからね。広いのはそこにあります」

楓さんが淡々と説明しながら、オイラ達は屋敷の奥へと足を運ぶ。そして進んで行くと大きな扉の前にたどり着く。楓さんが妖力で扉を開き部屋の中に入る。

中は長いテーブルとふかふかした座布団だけの広い畳部屋で、壁の高い位置にはこの里の族長だった妖狐の絵が並んでいた。

オイラはその絵を一つ一つ呆然と眺めていたが、ある一つの絵に眼を疑った。

「あ、オイラの絵が！」

オイラの絵が1番右端に飾られていたのだ。

「はい、烈狐丸さまは九代目の長ですから、もちろん飾られていますよ」

そうなんだ。うーん……。

「……だけどオイラなんか長でいいんすかねえ？」

顎に手を添え、オイラは妖狐の時の姿をした自分の絵を眺めながら楓さんに尋ねてみた。

「当然ですよ。烈狐丸さま以外に現在天狐はいませんから」

楓さんはオイラを見て微笑み、さも当たり前のように答えた。

確かに、この妖狐の里には現在オイラ以外に天狐はいない。オイラが里から出ようとした時に先代はもう里にはいなかった。

「……先代の長は何故族長をやめたんすかね？」

「新しい天狐がいたら長になる。これはこの里のしきたりですから。

だから例えその天狐が数年しか長をやつてなくても、新しい天狐が出て来たら直ぐ世代交代になります」

「……じゃあ、新しい天狐が里に現れたら、オイラ長を辞めてもいいんすか？」

オイラが問い掛けると、

「はい、そうです」

楓さんはオイラの絵を眺めながら返事を返した。

「新しい天狐が現れるまで……その間は、烈狐丸さまが長です。嫌なのは判つてますが、しきたりには従わなければいけません。一度里に住み着いた烈狐丸さまは無関係ではないのです。ですから、改めて私からも頼みます」

楓さんは真剣な面立ちで話し終えると頭を下げてお願いした。

うーん、これが彩なら遠慮なく“嫌だよーん”って優しげに挑発的に言つてやるけど、相手は楓さんだからなあ。

頭を下げてまで、オイラの気持ちを察した上で楓さんは頼んでる。

……仕方ないか、

「判つたつす。楓さんがそう頼むのなら、これは引き受けるしかないつすね」

「烈狐丸さま……、ありがとうございます！」

そう楓さんが微笑みながら御礼を言つと、

「玉藻様！」

若い妖狐が部屋に飛び込んできた。

「どうしたんすか、そんな慌てて？」

オイラが尋ねると若い妖狐は真剣な面立ちで、

「一大事です。里で飼育していた管狐が……、盗まれてしまいました！」

そう言い放つとオイラは、

「……な、なんだつてえー！……なんて驚いてみたりつす」

ちよつと悪ふざけをして見せた。

すると若い妖狐はずっこけて畳みに頭をぶつけ、

「ふ、ふざけないで下さいよ！　とにかく、長に報告せねばと思いきいいで来たのです！」

頭を摩りながら若い妖狐はまた慌てた様子で話し出す。

「事件が起きたら最初は長に報告する。これもしきたりなんすか？」

楓さんに尋ねると、

「そうですね。そして、解決させるのも長の仕事です」

真剣だが微笑んだ顔付きで答えた。

うえー。オイラが解決しなきゃダメなのか？　はつきり言って面倒くさいのだが、長になると引き受けた以上はやらないといけないか……。

「まあ、仕方ないっすね。その管狐を盗んだ犯人を捕まえるっすかあ」

「いえ、それが……。実は、犯人は解っているんです」

「へ？」

犯人は解ってる？　てつきり犯人を見つけ出して捕まえるかと思ったら、解っているのか……でも、

「犯人が解っているのに、何故捕まえないっすか？　捕まえられないほど逃げ足が速いんすか？」

尋ねてみると、その若い妖狐は一旦躊躇うと、小さく溜息をついて話し出す。

「実は、妹なんです。盗んだ犯人は……」

「……妹？」

詳しく話を聞いてみると、この若い妖狐は妹と管狐の飼育を任されていたらしいが、つい最近その妹が理由も告げず管狐を盗んで都会に逃げ込んだらしい。

追い掛けようにも、都会に行きたくない妖狐や慣れない妖狐もいて里を出て追い掛けるのは無理らしく、兄の方も追い掛けようにも盗まれてない管狐の飼育があるから離れる訳には行かないとのこと……、それで都会に詳しいオイラの出番って訳か。

どうせ都会に戻るつもりだったからちよいどいい。

里にはちょこつと顔を出すだけのつもりで来た訳だからね。里を出ようとしたらまた炎弾ぶつ放すのではと不安に思いながらも来たが、里を出る理由が出来たからそれはないだろう。だから安心して里を抜け出せる。

そうと決まればオイラは直ぐさま管狐と妹を里に返す頼みを聞き入れ里を出て行き、次の日には都会へ戻ってきた。

「はてさて、その妹さんを捜すっすかね」

「今回は私を同行しますね」

珍しいな、楓さんが監視に廻らずに一緒に行動を取るのは。

そう意外に思いながらもオイラ達は先ずコンビ二へ向かう。

コンビ二には、彩が働いているからだ。

「こんにちはっす」

そう明るい笑顔で挨拶しながら入ってきたオイラを見るなり彩は、「だあから耳と尻尾を隠して下さいって、何度言えば解るんですかあ！」

いい加減にしてくれといった様子で顔をしかめた。

「いきなりのご挨拶っすね」

オイラが軽口で返すと彩は癪に障ったのか眉を顰て頬をひくつかせる。

「はあ……。今回は何用ですか？ 楓まで連れて来て……」

溜息をつきながら尋ねた彩に、楓さんは詳しく訳を話した。

「成る程、管狐を……。通りで最近見掛ける訳ですか」

そう彩は顎に手を添え、考え込むそぶりを見せる。

「ん？ 彩、もしかして知ってるんすか？ 管狐を盗んだ妖狐の居場所を！」

「いいえ、知りません」

ちっ！ 思わせ振りがよ、役に立たない妖狐だな。

「烈狐丸様……。今なんか私にとって不愉快こと思ってますんでしたか……？」

「き、気のせいっす！」

彩、勘が鋭いなあ。

冷汗をかきながらオイラがそう思っていると、

「烈狐丸さま。兄が管狐を見掛けるくらいですから、先ずは見つけて追ってみると言うのはどうでしょうか？　そうすれば犯人に辿り着けると思いますよ」

そう横から楓さんが提案を出してきた。

「成る程、それはいいっすね。さすが楓さん、どっかの白狐と違い、賢いっす」

「烈狐丸様、白狐って私のことですか？」

「誰も彩とは言ってないっすよお、やだなあ自意識過剰による被害妄想っすか？」

何て悪戯っ子な笑み浮かべて言うて見たり……。あ、なんか彩のこめかみから青筋が……。これ以上からかうのは止めておこう。

「じゃ、じゃあ、彩はコンビニの仕事が急がしそうっすから、そろそろ出るっすか楓さん」

そしてオイラは楓さんを引っ張り、逃げるようにコンビニから出ていった。

——それから管狐を捜すこと2時間くらい経ち。

「はあ、なかなか見つからないっすねえ管狐」

オイラは溜息交じりで呟き、ベンチに腰を降ろす。

オイラ達は一休みする為に公園にいた。

オイラがよく寝所としての公園だ。木の上でよく寝る。

「彩が言ったことは嘘だったんすかね？」

オイラがそう言うのと、隣で座っていた楓さんが立ち上がり、あれと言って指をさした。

「あっ！　管狐っす」

指差す先には一匹の管狐が飛び回っていた。

「早く追い掛けしょう！」

楓さんはそう言って駆け出した。

オイラも続いて駆け出し、管狐の後を追う。

——追うこと20分。

オイラ達は公園から数キロ離れたアパートに着いた。

管狐はアパートの三階の窓に入って行った。窓は閉まっていたが、霊獣の管狐には障害物なんて関係なく擦り抜けて通れる。

アパートをぐるりと一周してみたが、管狐が出て来た様子はなかった。

「どうやらこのアパートの三階にいるみたいっすね」

オイラは確信し、そう口にすると楓さんも頷き、

「どちらにしろ行ってみないと解りませんね。とにかく入ってみましょう」

オイラ達はアパートに入って行き、三階の管狐が入ったと思われる部屋、303号室のドアをノックした。

すると――。

「はあい、どなたでしょうか？」

少し開いたドアの隙間から、とても綺麗な大人の女性が顔を覗かせた。

「ちよつといいつすか？　ここに、オイラと同じくらいの女の子がいますっすか？　名前は稲荷　南と言っすんが」

「え、もしかして南ちゃんのお友達ですか？」

「ええ、そうです。稲荷　南のお友達です」

楓さんがそう言つと、ぽっかり小さな口を開いて驚いていた女性は直ぐに口元を優しく緩め、

「そうでしたか、どうぞ、おはいりください」
すんなりと中に入れてくれた。

見る限り彼女は、管狐を盗んだ妖狐、稲荷いなり　南みなみと仲が良さそうだった。

中に入れてもらい部屋の奥に行くと予想通り管狐はいたが、
「よくもまあこれだけの管狐を盗み出せたっすねえ」

管狐の入る管は予想外にも部屋いっぱいに置いてあったのだった。

「……南がいまねね烈狐丸さま」

確かに部屋には南がない。

オイラ達が部屋を捜そうとすると、

「南ちゃんはチョコレートの材料を買いに行ってますよ」

お茶を持って来てくれた女性が教えてくれた。

「はい、お茶をどうぞ」

「あ、どうもっす」

オイラ達はお茶を受け取り飲んだ後に自己紹介をした。

「玉藻さんに、式部さんですね。はじめまして、私は佐山 さやま 美冬 みふゆと
言います」

「はい、よろしくっす」

オイラ達が美冬さんと握手をし終えると、

「あの、美冬さんは何の妖怪ですか？」

いきなり楓さんがとんでもない事を尋ねた。

いきなり失礼なのではその質問？

まあ妖狐の女の子と友達だから、妖怪の可能性は高いかもしれない。
い。

そうじゃないかもしれないけど……。

「ええ、そうです女郎蜘蛛です」

あ、妖怪だったんだ。しかも女郎蜘蛛とは、容姿がとても綺麗な
のも納得だ。

女郎蜘蛛はもともと普通の蜘蛛で、それが400歳も生きながら
えると妖怪化する大きな蜘蛛である。

そして外見がとびつきり美しい女性に化けて人間社会に溶け込む
のが多い。

しかし、何故南は管狐を盗んで里を抜け出し、この美冬さんの住
むアパートに？

気になったオイラは尋ねてみた。

「私が頼んだからです。私がバレンタインデーに美味しいチョコを

作りプレゼントしたいからと言ったから南ちゃんが、管狐を使つて
チョコレートの情報を集めて良いチョコレートの作り方を調べれば
良いと……」

成る程、友達的美冬さんの為に管狐を盗み、情報収集の為に使っているのか。

確かに管狐は人の心を読んだり出来たりするから凄腕のパティシエが持つてる秘密の味とかも知ることが出来る。案外ネットや雑誌で調べるより楽で確かな情報が手に入る。

更にその気になればパソコンの中に入り込み、そこから情報だつて手に入る。

——うゝん、しかし、

「南とはよく会つてるんすか？」

そう、里で飼育している為、里の外に出る事は出来ないはずの南と会つてると言うのは疑問だ。親しそうな様子からだと何回か会つてるようだが、南は里と都会をいつ行き来してるのだろうか？

「ええ、よく私の所に会いに来ますよ。里で管狐の飼育していて、兄と交代でやっているから一日一日に空きができるから、その空いてる日にこっそり里を抜け出して来ると言っていました」

そう言う事だったのか、それなら納得だ。

居場所も解つたし盗んだ動機も解つた今は、本人が帰つて来たら捕まえるだけだ。

そう思つたら、

「ただいまー！ 美冬、誰か来てるの？ ——つて烈狐丸様！」

調度良い具合に南が帰つて来た。

南はオイラと楓さんを目を丸くしながら啞然と見据える。

「な、何で烈狐丸様がここに！」

「あなたと盗んだ管狐を里に帰す為に来たのです」

慌てた声で尋ねた南に、楓さんが叱咤の怒りを込めた口調で説明すると、

「ご、ごめんなさい！ でも、どうしても美冬の力になりたくて、

バレンタインデーまで、チョコを作り上げるまでの間だけ借りるつもりだったんです……」

下を向きながら南は申し訳なさそうに言う。

「……でも、チョコを作る為に管狐を使ってまでやるものなんすかね？ それにチョコならスーパ〜とかのを買って渡すとかでも——」
「駄目ですよ烈狐丸様！ だって本命チョコですから手作りじゃないと気持ちも伝わりませんよ！」

オイラが言いかける途中に俯いていた南は顔をあげ、真剣な表情でずいずいと近付きながらチョコについて変な理屈を語る。

「そ、そうっすかぁ。んで、成果はあつたんすか？」

威圧され、オイラがたじろぎながら尋ねると、美冬さんがチョコを持って来て、

「試食してみて下さい」

そう言つてオイラにチョコを渡した。

ふむ、見る限り普通の丸いチョコだ。試しに食べてみる。

「ん……。甘く美味しいチョコっすね。中にとろりとした感じの柔らかいチョコが入ってるみたいっす、何が入ってるんすか？」

もう一個口に入れてオイラは尋ねた。

そしたら思いもよらない発言が返ってきた。

「蜘蛛の内臓です」

「ぶうー……っ！」

言つまでもないのだが、オイラは口から霧状にチョコを吹き出した。

てゆーか、何でものを食べさせるんだ！

オイラは急ぎ台所の水道に駆け寄り何度もうがいをした。

「烈狐丸様！ 酷いです。頑張つて作ったチョコなのに……」

「ふざけるなっす！ チョコに蜘蛛の内蔵何て入れる人が何処にいるっすか！」

「私達妖怪ですよ」

楓さん余計な事を！

てゆーか、管狐で情報を集めてる癖に何をどうしたらこんなチョコの製造を思い付くんだ！

それ以前にチョコと言う物を知ってるのかコイツら！

「でも、チョコは甘い食べ物って……、だからより甘く美味しくする為の隠し味に蜘蛛の内臓を……美味しいんですよ内臓」

「貰った人は中味知ったらショッキングすよ、そのチョコは……」
「そ、そうなんですか……？」

当たり前だよ美味しいからってまず蜘蛛の内臓は駄目だろ。

てゆーか、まず人間の常識を知らないさい！

それ以前に、

「そのチョコを誰にあげるつもりだったんすか？」

オイラが気になって聞いた途端、美冬さんは恥ずかしげに答えることを躊躇うが、

「……し、式部、式部 彩さんと言う妖狐です」

暫くすると頬を朱く染めて答えた。

しかし彩とは驚いた。楓さんもオイラと同じく隣で驚きの表情を見せていた。

「彩にそのチョコをあげるんすか？」

もしそうだとしたら彩が可哀相だ。

「そうですねよ烈狐丸様。美冬さん彩様に食べてもらう為に、頑張って作ったんですからねこのチョコを」

聞いてもいないのにまるで自分の事のように自慢げに話す南。

だが美冬さんと言うと、

「……そのつもりでしたが、玉藻さんが言うからには非常識なチョコみたいなので、新しいチョコを作ります」

そう悲しげに呟くときりつとした目付きに変わり、直ぐさまエプロンに着替え始めた。

そして、オイラ達に眼を向けると、

「玉藻さん、式部さん。お願いがあるんです。チョコを作るのに協力してくれませんか」

頭を下げて協力を頼んできた。

オイラが楓さんに意見を求むように眼を合わせると、楓さんは協力しましょうと応えた。

「別にいいんですけど、何をすればいいですか？」

「式部さんと南ちゃんには、チョコ作りの手伝いを。玉藻さんは試食です」

何故オイラだけ試食？

何て問い掛けたかったが、面倒な事になりそうな予感がしたので了解する。

楓さんも南もエプロン姿になり、チョコを作り始める。

それから2時間くらいが経ち、三個のチョコが完成した。

「玉藻さん、試食頼みます」

そう言われオイラは試食してみた。

オイラはまず、四角い板チョコを食べてみた。

一見普通の板チョコに見えるが味は、

「苦っ！ 苦すぎっす！」

なんだこりゃ！

力カオ90%顔負けの苦さだぞこれ！

いったい何をしたらこんな苦いチョコを作れるんだ？

とりあえず次のチョコだ。

今度は円型のチョコを食べてみる。

「甘っ！ 激甘っすよ！」

歯が痛い！ 虫歯になるぞこれ！

甘ければ良いつてもんじゃないだろ！

「これは楓さんの案で作りました」

楓さん……。くう、気を取り直して次だ。

今度はさっきの蜘蛛チョコと同じ形をした丸いチョコだ。

先の蜘蛛チョコのせいで抵抗あるが、しかし食べなければ！
いざ食してみる。

ん、これは――

バレンタインデー当日。

南を管狐と共に里に歸し、事を何とか大きくせずに済ました後、オイラ達は美冬さんが彩にチヨコを渡すのを見届ける為にこっそりと壁に隠れて様子を見ていた。

ずっとコンビニから彩が出るのを待つ美冬さん。

緊張してるみたいだ。

何度も深呼吸して解している。

暫くして、やっと彩が仕事を終えコンビニから出てきた。

美冬さんはすぐに彩に歩み寄り声を掛けた。

「あの！」

「ん……何ですか？」

「これ、受け取って下さい！」

そう言って彩にチヨコを渡すと美冬さんは頬を朱く染めたまま、逃げるように去った。

彩は呆然と美冬さんを眺めて……はなく、うんざりした様子でチヨコを見ていた。

「またか……」

また？

不可解に思いながら彩を眺めていると。彩は持っていた鞆を開ける。すると鞆の中いっぱいにチヨコが入ってるのが見えた。

「バレンタインにチヨコをくれる人が沢山いて、正直処分に困るんだよね、好きじゃないから。手紙入りのもあるけど、結局読まずにごみ箱いきになるし」

何て事を言うんだコイツは！

チヨコ貰えない男達とお前にチヨコあげた女性に謝罪しろ！

オイラがそう思い啞然と彩の様子を眺めていると、楓さんが横で炎弾を放つ構えを取っていた。

「美冬さんがせっかく完成させた美味しいチヨコを……兄さん……」

「最っ低です！」

もの凄い殺気と威圧感で、楓さんは炎弾を彩にぶち込んだ。

「うぎゃああああ！」

命中した！

「あっつああああ！」

ああ、彩が火だるまに……。

う、うゝんまあ、彩が悪いんだからこれは仕方ないよなあ。
そう思いながらオイラは苦笑いしながら彩を眺めていた。

終

（後書き）

どうも、かなり荒々しい内容になってしまいました。最後まで読んで下さった方々、本当にありがとうございます。文章に誤字や脱字が見られましたら、是非お知らせ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5907b/>

甘いようで甘くないバレンタインデー？

2010年10月8日14時23分発行